

マルクス=エンゲルス全集版

剰余価値学説史

3

REINER MARX
ZUGEGANGEN ÜBER
DEN MESSEBERG

剰余価値学説史(3) (全9冊)

1970年10月30日第1刷発行
1982年1月20日第4刷発行

定価はカバーに表示してあります

訳者◎ 岡崎次郎
時永 淑
発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9
発行所 株式会社 大月書店 印刷 三晃印刷
製本 田中製本
電話(営業)813-4651(編集)814-2931 振替 東京3-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

国 民 文 庫

26

剰 余 価 値 学 説 史

(『資本論』第四卷)

(3)

カール・マルクス 著
岡 崎 次 郎 訳
時 永 淑



大 月 書 店

目次

第五章 ネットケル。資本主義における階級対立を貧困と富と

の対立として示す叙述……………二二

第六章 余論。ケネーによる経済表……………二八

一 借地農業者と土地所有者とのあいだの流通。再生産が行なわ

れない借地農業者への貨幣の還流……………一九

二 資本家と労働者とのあいだの貨幣流通について……………二八

(a) 労賃を資本家の労働者にたいする前貸だとする、ばかげ

たきまり文句。利潤を危険補償とみなすブルジョア的見

解……………二八

(b) 労働者が資本家から買う諸商品。再生産が行なわれない

場合の貨幣の還流……………四二

三 経済表による借地農業者と製造業者とのあいだの流通……………五四

四 経済表における商品流通と貨幣流通。貨幣が出発点に還流す

るいろいろな場合……………六二

五 経済学の歴史における経済表の意義……………八〇

第七章 ランゲ。労働者の自由に関するブルジョア的—自由

主義的見解にたいする論難……………八二

補 録

科学の経済的役割に関する、労働と価値とに関する、ホッ

ブズの所説……………九七

ペティ……………九九

(a) 人口理論——不生産的職業にたいする批判……………九九

(b) 労働時間による価値の規定……………一〇二

(c) 土地価格、地代および利子の規定……………一〇七

(d) 「土地と労働とのあいだの自然的な同等関係」……………一二三

ペティ、サー・ダッドリ・ノース、ロック……………一二九

ロック。ブルジョア的自然法理論の立場からの地代および

利子の取扱い……………一三一

ノース。資本としての貨幣。利子率の低下の原因としての

商業の拡大……………	一三八
富の源泉としての勤労に関するバークリの所説……………	一三六
ヒュームとマッシー……………	一三七
(a) マッシーとヒュームの利子論……………	一三七
(b) ヒューム。利潤と利子との低下は商工業の繁栄による……………	一三八
(c) マッシー。利潤の一部分としての利子。利潤率からの利 子の高さの説明……………	一四一
重農学派に関する章への補足……………	一四七
(a) 経済表に関する補足的覚え書き……………	一四七
(b) 重農学派の重商主義への逆もどり。自由競争への要求……………	一四九
(c) ケネー。交換では価値は現実には増加しない……………	一五〇
ビュア。土地貴族の賛美……………	一五二
ジョン・グレー。重農学派の立場からの土地貴族にたいす る論難……………	一五四
余論(生産的労働について)……………	一六二
資本の生産性。生産的労働と不生産的労働……………	一六五
(a) 社会的労働のいつさいの生産力は資本の生産力として現	

われる……………	一六五
(b) 資本主義的生産の体制内での生産的労働……………	一七一
(c) 資本と労働とのあいだの交換における二つの本質的に違 っている契機……………	一七八
(d) 資本にとっての生産的労働の独自の使用価値……………	一八三
(e) サービスを提供する労働としての不生産的労働。資本 主義の諸条件のもとでのサービス提供の購買。資本と 労働との関係をサービス提供の交換と考える俗流的見 解……………	一八五
(f) 資本主義社会における手工業者および農民の労働……………	一九四
(g) 物質的な富に実現される労働としての生産的労働の副次 的規定……………	一九九
(h) 非物質的生産の領域における資本主義の諸現象……………	二〇〇
(i) 物質的生産の総過程という視角からみた生産的労働の間 題……………	二〇一
(k) 物質的生産の一部門としての運輸業。運輸業における生 産的労働……………	二〇三

『資本論』第一部および第二部のプラン草案……………	二〇五
(a) 『資本論』第一部または第一篇のプラン……………	二〇五
(b) 『資本論』第三部または第三篇のプラン……………	二〇六
(c) 『資本論』第三部第二章のプラン……………	二〇七
注 解……………	二〇九
文献目録……………	1
人名索引……………	22
度量衡および通貨表……………	35

『剰余価値学説史』 各冊目次（全九冊）

文庫版(1)

序文

手稿『剰余価値に関する諸学説』の内容目次
一般的覚え書き

第一章 サー・ジェームズ・ステュアート。

「譲渡にもとづく利潤」と富の積極的

増加との区別

第二章 重農学派

第三章 A・スミス

文庫版(2)

第四章 生産的労働と不生産的労働とに関する

諸学説

(1) (3)は全集第二六巻第一分冊)

文庫版(4)

第八章 ロートベルトウス氏。余論。新しい地

代論

第九章 いわゆるリカードの法則の発見の歴史

第二〇章

に関する覚え書き。ロートベルトウス
に関する補足的覚え書き（余論）

費用価格に関するリカードおよびA・
スミスの理論（反論）

A 費用価格に関するリカードの理論

B 費用価格に関するスミスの理論

文庫版(5)

第一章 リカードの地代論

第二章 差額地代の表とその解明

第三章 リカードの地代論（結び）

第四章 A・スミスの地代論

第五章 剰余価値に関するリカードの理論

A 利潤および地代に関するリカードの

所説

B 剰余価値に関するリカードの所説

文庫版(6)

第一六章 リカードの利潤論

第一七章 リカードの蓄積論。その批判（資本

の根本形態からの恐慌の説明）

第一八章 リカード雑論。リカードの結び（ジョ

ン・バートン）

A 総所得と純所得
B 機械 機械が労働者階級の状態に及ぼす影響に関するリカードとバートの所説

補 録

文献目録、人名索引

(4) (6) は全集第二六卷第二分冊

文庫版(7)

第十九章 T・R・マルサス
第二十章 リカード学派の解体

文庫版(8)

第二十一章 経済学者たちにたいする反対論(リカードの理論を基礎とする)

第二十二章 ラムジ
第二十三章 シェルビュリエ

文庫版(9)

第二十四章 リチャード・ジョーンズ
補 録 収入とその諸源泉。俗流経済学
文献目録、人名索引、事項索引

(7) (9) は全集第二六卷第三分冊

〔第五章〕 ネッケル

〔資本主義における階級対立を貧困と富との対立として示す叙述〕

先にあげたランゲからのいくつかの引用文は、すでに、彼には資本主義的生産の本質が明らかであったことを証明している。⁽¹⁾けれども、ここではランゲは、ネッケルのあとに挿入されるべきである。⁽²⁾

ネッケルは彼の二つの著書、『穀物法と穀物取引について』(最初に出版されたのは一七七五年)および『フランスの財務行政について』において、労働の生産力の発展は、労働者が、自分自身の賃金の再生産のためにより、少しの時間しか要せず、したがって彼の雇い主のために無償でより多くの時間労働することに寄与するにすぎないことを指摘している。その場合に彼は、正当にも、平均労賃、賃金の最低限を基礎にすることから出発している。しかし、彼が本質的に取り扱っているのは、労働そのものの資本への転化やこの過程による資本の蓄積ではなく、

むしろ、貧困と富との、貧困と奢侈との、対立の一般的な発展である。というのは、必要な生活手段を産出するのによりわずかな労働で足りるようになるのと同じ程度で、労働の一部は、しだいに余分になり、したがって奢侈品の生産に利用され、他の生産部面で使用されうるようになるからである。こうした奢侈品の一部は耐久的なものである。そこで、その奢侈品は、剰余労働を自由に利用しうる人々の手もとで世紀から世紀へと蓄積され、このようにして対立はますます顕著になる。

(1) 手稿ではこのあとに続けて、彼の著書では、となっている。

(279) 重要なことは、ネッケルが総じて剰余労働から、労働しない諸身分の富^{三四二〇一}——利潤と地代⁽¹⁾——を導き出していることである。だが、剰余価値の考察においては、彼は、総労働日の延長からではなく必要労働時間の短縮から生ずるところの相対的剰余価値を念頭においている。労働の生産力は、労働条件の所有者の生産力となる。そして生産力そのものは、一定の成果を生産するために必要な労働時間の短縮に等しい。主要な箇所は次のような文章である。

(1) 手稿では、収入、となっている。

第一に、『フランスの財務行政について』（『著作集』、第二巻、ロザンヌおよびパリ、一七八九年）。

「私は、社会の諸階級のうち、ある階級の富はつねにほぼ同一であるにちがいないことを知っている。また私は、もう一つの階級の富は必然的に増加していることも知っている。そ

こで、ある関係とある対照とから生ずる奢侈が、この不均衡の増大に続いて現われざるをえなかったものであり、年の経過とともにますます顕著とならざるをえなかったのである。」（同書、二八五／二八六ページ。）

（階級としての両階級の対立がすでにみごとに示されている。）

「社会的諸法則の影響によってその運命をいわば決定されている社会階級は、次のような人々のすべてから成っている。すなわち、自分たちの手の労働によって生活しているので、いやおうなしに所有者の」（生産条件の所有者の）「法則に支配されており、単純な生活必需品に比例した賃金でみずからを満足させざるをえないような人々である。彼らの競争と彼らの欲求の急迫とが、彼らの従属状態を生じさせる。そして、こうした状態は変わりようがない。」（同前、二八六ページ。）

「したがって、あらゆる機械的技術を簡單化してきたところの、不断の諸道具の発明は、その所有者たちの富や財産を増加させてきた。これらの道具の一部分は、土地の耕作費を減少させることによって、そのような財貨の所有者が意のままにしうる収入を増加させてきた。天才の諸発見物である他の一部分は、工業労働を非常に容易にしてきたので、生活手段の分配者」（すなわち資本家）「に奉仕する人々が等しい時間内に同じ報酬であらゆる種類の生産物をより多量に生産することを可能にしてきた」（二八七ページ。）「今日八万人の人によってなされる仕事を遂行するために一〇万人の労働者が必要とされたと仮定しよ

う。余った二万人は、どう考えても賃金を得るために他の仕事につくほかはなかったであろう。そして、このことから生ずる彼らの手労働の新しい諸生産物は、富者の享樂と奢侈とを増加させるであろう。」(二八七／二八八ページ。)

(1) ネットケルの原文では、財産の分けまえ、となっている。

彼は続けて言う。「というのは、なんら特別の才能を必要としないすべての職業に割り当てられる報酬は、つねに各労働者にとっての必要な生活資料の価格に比例することを、忘れてはならないからである。したがって、生産の迅速さは、それに必要な知識が一般的になつてしまった場合には、労働者たちの利益にはならないで、その結果は、ただ、土地の生産物を意のままにしうる人々の趣味や虚栄心を満足させるための諸手段の増加となるだけである。」(同前、二八八ページ。)

「人間の勤勞によって形づくられたり形を変えられたりするいろいろな自然財のうちには、その耐久性が人間の普通の一生よりもはるかに長いものがたくさんある。そして、各世代は、先行の世代の労働の一部を相続してきた。」

「ここではネットケルは、A・スミスが「消費財源」と呼ぶものの蓄積だけを考慮に入れている。」

「そこで、どんな国にも、ますます多量の技芸の産物の不断の蓄積がある。そして、この量はつねに所有者たちのあいだに分配されるから、彼らの財産と多数の市民階級のそれとのあいだの不均衡は、必然的にますます大になり、ますます顕著になってきている。」(二八九

ページ。

したがって、

「華美や奢侈の対象物を地上に増加させてきたところの工業における労働の加速化、このことから増大してきた蓄積の期間の長さ、および、これらの財貨を社会のただ一つの階級の手にはいるものとしてきた所有の法則、……奢侈のこうした大きな諸源泉は、鑄貨の量がどうであったにしろ、どんな場合にも存在してきたであろう。」（二九一ページ）

（この最後の箇所は、奢侈が貨幣量の増加から生ずるとする人たちにたいする反駁である。）
第二に、『穀物法と穀物取引について』（『著作集』、第四巻）。

「手工業者または農民にすこしの貯えも残らない場合には、彼らはもはや争うことはできない。彼らは、明日、餓死するのがいやなら、今日働かなければならない。そして二四二二所有者と労働者とのあいだのこの利益の争いにおいては、労働者は自分の生命と家族のそれとを賭けているが、所有者のほうは自分の奢侈の増大が単に遅れることを賭けているにすぎない。」（同前、六三ページ）

このような、労働をしない富と、生きるために労働をする貧困との対立は、同じく知識の対立をもひき起こす。知識と労働とが分離する。前者は、それ自身資本として、または富者の奢侈品として、後者に対立する。

「ものを知り理解する能力は自然の一般的なたまものであるが、しかしそれは教育によっ